

令和元年度百合便り
校長だより
12月号



さて、いよいよ今年もあと数えるところわずかとなりました。どんな年でしたか？今年の漢字は「令」でしたね。生徒の予想では「令」「災」が多かったですが、「令」は納得です。時代の変わり目を体験できることはとても感慨深いですし、変化が大きいだけ、「生きている」実感がわきます。昭和生まれの私としては、三つの時代をまたにかけて生きているわけで、実年齢より生きた感じもします。

では百合丘はどうだったでしょうか？

今年は55分を活用して、授業後の振返りを重視、「何ができたのか」「何ができなかったのか」から次の目標を見定めて、日々のステップにしっかりと上がっていくことを学校目標として取り組んできました。これは人の成長にも言えることです。ですから私たち教員も振り返り、次につなげないといけないといけません。

私たち教育に関わるものの振返りは、自分が「何をしたのか」ではなく生徒に、職員に「何を残せたのか」なのだと思います。一方通行ではなく、相手とコミュニケーションをとりながら「育てる」ということはそういうことなのだと思います。すぐに成果となるわけではないけれど、残せたものが「気づき」に変わり、そこから自分で歩き始めることが本来の目的です。

校長という立場から言えば、職員に「何を残せたのか」なのだと思います。そしてそれは職員から生徒に「残したモノ」になっていなければ、そこにはまだ足りないものがあるのだと思います。

本年度百合丘は授業時の振返りとして、「ループリック評価」を実践しました。また、思考力・判断力・表現力・協働力育成に向け、グループワークやペアワークを推奨しました。ご家庭でそのような話が出ているのでしょうか？行事については体育祭の時期変更がありました。熱中症対策には効果的でしたが、生徒の思いも聞こえたので、これについては生徒アンケートで意見集約し、次年度は生徒の準備期間なども考え、検討中です。前例踏襲にこだわらず、変えていくことは進化そのものです。そしてそこに生徒を巻き込んでいければ理想的です。そんなことを振り返りながら、生徒が「母校百合丘」をしっかりと心に刻めるよう、ここからまた、始めなければと思います。

話は変わりますが、私の家では「新年の一文字」を書いていました。今年の漢字ではなくて、これからの所信表明の漢字です。それぞれが書いた一文字を一年間リビングに貼っていましたが、案外これがその年の目標になって、へこたれそうな時に思い出したりしたものです。大人になってからは「書く」はしていませんが、なんとなく心の中で「今年の一文字」を今でも決めています。そんなことから家庭での会話がはずんだりもしました。「我が家ならではの習慣」もいいものだと思います。思い立ったが吉日、令和を境に始めてみませんか？

とにもかくにも、今年もお世話になりました。1月からもまた、よろしくお願ひします。